

正覚院の寛文 11 年銘十九夜塔と享保元年銘十五夜塔について

蕨 由美

はじめに

中世から香取の海と東京湾岸をつなぐ要衝の地、村上にある池證山鴨鴛寺正覚院には、鎌倉期の木造釈迦像、南北朝期の板碑や室町時代の宝篋印塔などが残されているが、個人の墓塔や講による供養塔が庶民によって建てられる江戸時代になると、正覚院境内にも早くからさまざまな石塔が造立されるようになる。

この江戸時代前期の石塔の事例として、寛文 11 年（1671）銘の如意輪観音像十九夜塔と、また享保元年（1716）銘の地藏像十五夜塔が特に注目される。

この 2 基の石塔については、『八千代市の歴史』（*1.）所収の「石造文化財」でもその意義が述べられているが、前者は八千代市内初出の十九夜塔として、また後者は八千代市唯一の十五夜塔として貴重な事例であることから、その出現する背景を含めて紹介する。

その他の女人講関連石造物については、別稿 P ●をご覧くださいと思う。

1. 寛文 11 年銘の如意輪観音像十九夜塔

正覚院境内の右奥、釈迦堂の背後の墓地への階段の上り口左下に、半ば背後の斜面に埋まるように立てかけられている丸彫りの小ぶりの石仏がある。頭部と右上腕を失い、不釣り合いな他の仏像の頭部をセメントが接合されているが、二臂の如意輪観音像（Fig.1）である。



Fig.1 寛文 11 年銘の如意輪観音像十九夜塔

この如意輪観音像の背面（Fig.2）を見ると、両肩から U 状に垂れた天衣に左肩から「念仏講衆為菩提也」右肩から「造立十九夜女人」、腰部の垂れ下った天衣の右裾 2 条に「村上村道師」「池證山鴨鴛寺」、左裾には「寛文十一年敬白」「辛亥十月十九日」と銘が刻まれている。



Fig.2 如意輪観音像十九夜塔の背面銘文

八千代市内で江戸時代初期の十九夜塔としては、高津観音寺の延宝 2 年（1674）銘の光背型六臂如意輪観音像を像容の整った市内初出の十九夜塔として『史談八千代』30 号で紹介したが、「石造文化財」（*1.）によれば、この石塔はさらに 3 年早い寛文期の十九夜塔で、千葉県内でも早い時期の十九夜塔である。

・常総における十九夜塔とその成立期の特徴

関東北東部では、旧暦 19 日の夜、女性が寺や当番の家に集まって、如意輪観音の坐像や掛け軸の前で経文、真言や和讃を唱える「十九夜講」が盛んに行われていた。

この十九夜講が、祈願の信仰対象あるいは成就のあかしとして建立する石塔が「十九夜塔」であり、右手を右ほほに当てた思推相で右ひざを立てて座る姿の如意輪観音像が主尊として彫刻される。

十九夜塔の発祥としては、茨城県つくば市平沢の八幡神社にある雲母片岩の石塔 (Fig.3) が、稚拙な仏像らしき座像と「寛永九年 (1632) 三月十九日」の銘が刻まれていることから、これが最古と推測されている。

千葉県では承応元年 (1652) の香取市結佐大明神境内の「十九夜侍之供養／十二月十九日」銘の宝篋印塔の残欠が古く、次いで、明暦元年 (1655) 造立の芝山町加茂普賢院の「十九夜侍」銘のある六地藏立像石幢、3 番目は、万治 2 年 (1659) 山武市本須賀大正寺の「十九夜念佛」銘の宝篋印塔で、このころまでは十九夜の講も念仏講と不可分であり、また主尊も定まっていなかったようである。

如意輪観音を主尊とした十九夜塔の初出は、茨城県利根町布川の徳満寺に万治元年 (1658) に造立された 4 手の如意輪観音像を線彫りした板碑型石塔 (Fig.4) であるが、如意輪観音像を舟型光背に浮彫りした典型的な十九夜塔が出現するのは、万治 3 年 (1660) 千葉県山武市戸田の金剛勝寺の二臂像の石塔 (Fig.5) からである。

寛文期に入ると、寛文 3 年 (1663) 山武市松ヶ谷の勝覚寺、寛文 5 年 (1665) 印西市小倉青年館の石塔をはじめ、寛文 10 年 (1670) まで千葉県内で 38 基が造立され、さらに寛文 11 年から延宝 8 年 (1680) までの 10 年間の数は 125 基を数える。

寛文 11 年正覚院の十九夜塔が造立されたころは、印



Fig.3 寛永九年 (1632)
つくば市平沢 八幡神社石塔



Fig.4 万治元年(1658)
利根町布川 徳満寺の石塔



Fig.5 万治 3 年 (1660)
山武市戸田金剛勝寺の十九夜塔

幡地方を中心に文字数の多い願文などを光背に刻む六臂や二臂の如意輪観音浮彫り像の十九夜塔が、次々に造立され始めるころにあたるが、この正覚院十九夜塔が浮彫り像ではなく、より丁寧な丸彫り像であるということは他に類を見ない。おそらく小堂内に安置されたこの観音像を前に、毎月 19 日には村上村の女性たちが集って礼拝し、念仏を唱えていたと思われる。

2. 享保元年銘の地蔵像十五夜塔

同じく正覚院境内の右奥、釈迦堂の背後の墓地への階段左下に、コンクリートの基壇上に 4 基の地蔵菩薩像が並んで安置されているが、そのうち左にある光背型浮彫像が享保元年（1716）銘の十五夜塔（Fig.6）である。

舟型光背の右上部を欠いているが、丸みを帯びた優しい表情の顔立ちで、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ延命地蔵の立像である。



Fig.6 正覚院の享保元年銘地蔵像

・正覚院の享保元年銘地蔵像の銘文

この享保元年銘地蔵像には、光背に向って右側に「享保元／丙申／天十一月廿四日」、左側に「奉造立十五夜念佛」、さらに光背下端右に「おつる」、左に「おいわ／おい□」、台座にも「村上村／はなえ／おふな／おまつ／おはる／おるみ／おつま／おはる／おふね／おたま／□□た／□□つ」と十数名の女性の名前が彫られている。（Fig.7）



Fig.7 享保元年銘地蔵像 台座部分の銘文

この銘文からこの地蔵像石仏は、念仏中心の女人講としての性格が明瞭にわかり、また「十五夜」の銘を持つ八千代市内唯一の石塔であり、また北総西部においても数少ない十五夜塔の一例として貴重な資料である。

・地蔵像石仏と女人信仰

地蔵像石仏と女人信仰の関連は中世から深く、江戸時代初期には念仏講に集う女性も参加して、優れた像容の地蔵像石仏が建立されている。近隣では、船橋市本町 2 丁目路傍の「西向き地蔵」（Fig.8）が万治元年（1658）の建立で、「念仏講中間拾貳人 同女人十六人 さんや村」の銘を持つ。



Fig.8 船橋市本町「西向き地蔵」

また八千代市米本の寛文 13 年（1673）建立の「座り地蔵」は、「女房衆念仏講同行二十三人」の銘がある。

地蔵菩薩、特に「延命地蔵菩薩経」で説かれる地蔵は、「十種の幸福＝女性なら出産できる、健康で丈夫になれる、人々の病を悉く取り除く、寿命を長くする、賢くなる、財産に溢れるほど恵まれる、他の人々から敬愛してもらえらる」などのご利益があるとされ、女性たちから特に厚い信仰を受けたのであろう。

・十五夜待供養塔の分布と特徴

月待信仰には十三夜から二十九夜までのものがあるが、茨城県南部から北総地域では十九夜待と二十三夜待が最も一般的で、女人信仰に最も関係が深いのは、十九夜の月待信仰であるとされている。（*2.）また、茨城県利根町では「十六夜念仏」などの銘のある十六夜塔が 23 基残されていて、地域的な特徴となっているが、二十三夜塔と同じく、必ずしも女人信仰とイコールではない。

十五夜待供養塔が多い地域として注目されるのは、東総地方である。

服部重蔵氏の昭和 61 年までの調査（*3.）によれば、北総全体で 53 基、そのうち東総に 44 基（十九夜塔を含む月待塔全数は 307 基）が集中し、建立年は寛文から文化まで。刻された主尊は、地蔵菩薩 14 基、阿弥陀如来 10 基、如意輪観音 9 基、子安観音 5 基、聖観音 4 基、大日如来（胎蔵界）1 基、文字塔 1 基で、年代別にみると、大日如来→阿弥陀如来→地蔵→聖観音→如意輪観音→子安と変わっていくとのことである。

また服部氏の調査当時は、まだ十五夜講が東総地方 4 集落に現存し、かつてはこの地域全般に十五夜待信仰が普及していたと推測されている。

なお、石造物悉皆調査がなされている 10 市町村のデータをベースにした筆者の分析結果では、52 基中、旧佐原市が 26 基、成田市 14 基、旧小見川町 6 基、旧印旛村 3 基で、やはり東総が多い。主尊は、如意輪観音像 17 基、子安像 16 基で、地蔵像は 6 基にとどまるが、小見川町新福寺の元禄 15 年（1702）から正覚院のこの塔を含め地蔵像 5 基が 18 世紀前半の十五夜塔造立の早い時期を占め、また女性に限定しない「善男善女」銘もみられる。

以上のデータから推測すると、北総の女人信仰も、18 世紀中葉には、如意輪観音を主尊とする十九夜塔にほぼ収斂されていくが、正覚院のこの地蔵像十五夜塔は、複数の月待講や念仏講を母体とした多様な形態が、江戸時代初期の印旛地域にも存在したということ物語るものといえよう。

- *参考資料：1.『八千代市の歴史 近代・現代Ⅲ 石造文化財』平成 18 年 八千代市
2.『女人哀歓－利根川べりの女人信仰』榎本正三 平成 4 年 崙書房
3.『東総の石仏』服部重蔵 昭和 61 年 言叢社